慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゲーテと中世のミンネ : シュタイン夫人の場合
Sub Title	Goethe und die Minne des Mittelalters
Author	相良, 守峰(Sagara, Morimine)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.227(120)- 234(113)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0234

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲーテと中世のミンネ
（シュタイン夫人の場合）

相　良　守　峰

ドイツ精神史上のいろいろな現象を検討するとき，われわれはよくそれがゲーテのある体験もしくはある思想との深い契合を示すものが多いのに気がつくのであるが，それはすなわち一個のドイツ人としてのゲーテが，ならびなく豊かな運命の恩寵に恵まれて，自己の生まれながらに有するあらゆる天分を八面玲瓏に育てあげ，およそドイツ人たるものの心に芽生えうるすべての性能を，自分一個のたましいの上に発揮していることを証明しているのである。その意味でゲーテの内面生活は，ドイツ民族性の象徴であるといっても差支えないと思われるが，なかでも著しいのは，この詩人がその一生を賭して成しとげたところの自己形成，換言すればシュトゥルム・ウント・ドラング的ゲーテから古典主義的ゲーテへの蟬脱が，ドイツ民族の最大にして永遠な自己形成，すなわちゲルマン的な巨人主義が南欧的形成観念を摂取して節度あり秩序あるドイツ精神を樹立するにいたった，その民族的体験を象徴てしいる点であろうと思う。「ヴェールター」(Werther) や「ゲッツ」(Götz) を生んだ若いゲーテの情熱的な奔放な巨人的生活態度は，プロメートイスのような業罰と苦悩とを体験したが，やがてワイマルに移ってからの宮廷的な社交生活や，自然科学の研究や，殊にシュタイン夫人との恋愛によって，これまでの主観的な，ディオニュソス的な態度が次第に鍛錬陶冶されて，客観的なおちつきとアポロ的な明澄さを加えてき，ついに一年有半のイタリアの旅によって沈静典雅な古典主義的人格と芸術とをつくり上げたことは周知のことである。この過程はもとよりゲーテという個性の無二無三の必然な行き方であり，決して他の道をかえりみ，また意識的選択などなすべき余地のあるはずのないものであったけれども，これは遥か中世のむかしに，ドイツ民族が滅びからまぬかれるために履んできた，その大いなる体験と

全く同じ道程にほかならなかったと思われるのである。

およそドイツ文学史において，文学精神のもっとも昂揚した時代が三たびあった。それはゲルマン民族異動時代から約百年たった後の紀元600年のころと，それからまた600年を経てホーエンシュタウフェン王朝のころ，すなわち1200年前後と，さらに600年を経過したゲーテ時代とがこれである。しかるに最初の隆盛期の文学，すなわちゲルマンの英雄を描いた歌謡の類はほとんどキリスト教徒のために湮滅したので，このころの題材は第二次隆盛期にあたる十三世紀の文学，たとえばあの有名な敍事詩「ニーベルンゲンの歌」(Das Nibelungenlied) などにおいてうかがうほかはない。しかるにこれらの英雄文学は，本質的に異教徒であるゲルマンの英雄がその武力に物をいわせて自己の権勢を拡大し，財産と美女とをわがものとし，要するに力をもって自分の生命意欲を存分に発揮した結果，自身も他の英雄によって悲惨な最後をとげる悲劇である。力で立つものは力で敗れる。英雄必滅というのが当時のゲルマンの慣いであったのである。

ギリシアの酒神ディオニュソスは，情熱の神である。ギリシア人も燃える生命欲に根ざす暗い情熱のために幾多の悲劇をかもし出した。光の神アポロは，また理性の神である。情熱の暗さを照らす理性の光は，同時に奔騰する生命意欲を抑える規制である。ここにギリシア人は救いを見いだした。プロメートイスのようなゲルマンの巨人主義を救うものはどこからきたであろうか，それは南欧から伝来したキリスト教であり，キリスト教とむすびついていたギリシア・ローマの教養，中んずくアリストテレスの論理的規範やストア学のような禁欲的教説であり，また節度を重んじる騎士の宮廷の作法であった。これらはすべて南欧や西欧からドイツに浸潤してきて，無軌道な情熱を収束し，ゲルマンの英雄をドイツの騎士に鍛えあげるところの形成原理としてはたらいた。これがドイツ的教養 (Bildung) の最初の顕著なあらわれであり，このような形成作用を待ってはじめて人間の意欲は文化を生みだすことができる。

このような騎士の教養契機として，もっとも著しく眼につくのは婦人奉仕，あるいは恋愛奉仕という現象である。これは当時の騎士が身命をなげうって主君に仕え，また十字軍遠征などに従って神に仕えることと相ならんで，自分の崇拝する一人の婦人に生命をも惜しまず奉仕するというのが義務のようなものであった。この恋愛(ミンネ) (Minne) の対象としては主として身分が高く，教養あり，かつ人妻であるものが多く選ばれた。当時のドイツ文学としては，シュトラースブルクのゴットフリート (Gottfried von Strassburg) の筆に成る「トリスタン」(Tristan) などはその代表的なものであるが，騎士は

誠実にかつ忍耐ぶかくその愛人に奉仕し，決して相手から強制的に愛をうばうような態度を示してはならなかった。彼は粗暴なふるまいや軽挙な動きをつつしみ，自分の騎士としての価値をみとめて寵遇(ゲンスト)を恵まれるまで，ひたすら自己教養をつとめるのである。相手が身分のある人妻であればこそ，一そう騎士にとってそれが自己形成の契機として役立つのである。身分の低い少女に対する愛などは「低い愛」として軽蔑し，非難されたのであった。もっとも，南フランスあたりを中心とするこのような人妻に対する愛というものは，結局ドイツ人には適さないものであったらしく，当時の第一流のドイツの詩人，たとえば叙情詩人ワルター（Walther von der Vogelweide）や敍事詩人ウォルフラム（Wolfram von Eschenbach）などは清純な乙女に対する恋を描いたけれども，当時一般の騎士のミンネとは前記のようなものであり，それが騎士の自己形成のために至大な役目をつとめたことは争われない。

時はそれから約600年をへだて，時代の思想も習俗も全然かわっているけれども，ゲーテがシャーロッテ・フォン・シュタイン（Charlotte von Stein）に対する恋は，それがゲーテ自身に及ぼした影響において，また愛人が身分と教養の高い人妻である点において，中世騎士のミンネと全く相似的であったことを，私は興味ふかいことと思っている。シュタイン夫人への愛は，ゲーテの数々の他の恋愛が清純な若い乙女を対象として刹那にもえあがり，短時日のうちに終りをつげたものの多いのに対し，十余年のあいだほとんど全精神をこれに傾倒しており，しかも相手が7歳も年長で7人の子の母であり，情熱的性格というよりはむしろ極めて理性的な婦人であったということは一見奇異な現象であるが，この奇異に見える諸条件こそ，詩人に対して他の恋愛では見られないほど偉大な影響をあたえる契機であったことは，中世騎士の場合と同然であると思われる。しかもドイツ本国においてもゲーテのこの恋愛を騎士のミンネと比較考察した人がなさそうなので，私が敢えてこの問題をとりあげる気になったのである。

シュタイン夫人その人に関しては，或いはイフィゲーニエや，「タッソー」中の公女レオノーレなどを引合いに出して，これぞ彼女をモデルとして描いたものであるとなして彼女の美しい徳性を讃美するものがあるかと思うと，一方ゲーテが後にクリスティアーネを愛するようになってから，口ぎたなく彼を罵ったりしたその慎しみのない醜い態度から推して，彼女を悪しざまにいうものもあって，種々のシャーロッテ観があるのであるが，彼女の人物を知るために最もよい資料となるべきゲーテへの彼女の手紙が全部失われている以上，われわれはゲーテの書いたものを通して彼女の人柄を想像するしか

ないのである。彼女の容貌については，シラーが次のように印象を語っている。「彼女はまことに独得な興味ある人物である。彼女はついぞ美人であったことはないであろう。けれどもその顔には穏やかな真面目さと，特異な開けっぱなしな態度とがあらわれている。健全な常識，感性，及び真実性が彼女の本質のなかにこもっている。」これによって見ても，シュタイン夫人は感覚的な美とか性的な魅力などとはちがった，性格的な牽引力をそなえていたもののようである。

ゲーテが彼女と交際をはじめたのはワイマルに移ってから程なく，すなわち1775年11月の半ばごろからであるが，当時はなお故郷におけるリリー・シェーネマンへの愛情が余燼をのこしていた。けれども同じ年のクリスマスのころには，すでにシュタイン夫人という明星が彼のこころを照らしはじめ，リリーの光はうすれてきていた。ゲーテのシュタイン夫人にあてたおびただしい文通は，翌年1月7日からはじまっている。彼は彼女に対して，殊にはじめのうちは異性として，官能的要素を多分にふくんだ愛を感じていたのであるが，次第にまた夫人の心の世界にも退引きならぬ強い引力をもって引きつけられてゆき，ついに彼女に対し，まったく精神的な隷属の状態となってしまった。

しかるに夫人の方では，かねて有名な「ヴェールター」や「クラヴィーゴー」(Clavigo) の詩人として尊敬していたゲーテが，会ってみると宮廷的作法を少しも心得ぬ粗野な若者であったのに少なからぬ反撥をおぼえたらしい。彼女が友のチンマーマン (Johann Georg Zimmermann) にあてた手紙にもそのことがうかがわれる。たとえばゲーテがシュタイン夫人に対してあまり馴れ親しむのに当惑して，彼女は，1776年3月6日に，次のようなことを報告している。——ゲーテがきわめて親しげにかつ馴れ馴れしく彼女に対して du と呼ぶので彼女は最もやさしい態度でそういう呼び方をする癖をつけないようにとことわったとき，彼はソファーから跳びあがって，自分のステッキをさがそうと室内をぐるぐる往ったり来たりしたが，ついにさがしあてず，とうとう彼女に別れの挨拶もせずに駆け去ったと。

それから2日目のシュタイン夫人の手紙には，ゲーテのことを「人でなし」と呼び，その粗暴にして口のわるいことを非難し，それが公爵に非常な感化をおよぼしていることを心配して，自分はあの方とは決して友だちになれぬように感じると訴え，かつ「あの方の私どもの種族（女性）との交際の態度が気にいりません。それはいわゆるコケットというものであり，あの方の交際には十分尊敬がこもっていないのです」と書いている。しかし彼女がこのような手紙を書いたからとて，彼女がまったくゲーテを嫌悪して

いたと考えるなら，それは皮相の見であろう。彼女の胸奥には，ゲーテの愛慕の態度を心うれしく感じる気持もあったに違いない。なぜならば彼女が単に親の意志にしたがって結婚した夫フリードリヒ・フォン・シュタイン男爵は，ワイマルの宮廷で主馬の頭の役をつとめており，職務には勤勉であったが，教養たかく心情ゆたかな夫人の心を満足させうるような人物ではなかった。彼女はその点はなはだ心さびしく，ただ宮廷における社交と，子供の教育とにその日を送っていたのであった。それゆえ，かねてから自分の愛読していた詩人である風姿颯爽たるゲーテによって好意と奉仕をささげられて，これをよろこばなかったはずはないのである。殊にゲーテは後にはシュタイン家の子供の教育のこともつかさどってくれたのである。にもかかわらず彼を悪しざまに批評し，「決して友だちにはなれそうもない」などといったのは，多分に人目をはばかる気持から，故意にゲーテについての一面の印象を誇張して書いたものとも考えられるうえに，このような言葉を書きしるす彼女の気持には，迷惑そうな表情のなかに一種誇らしい感情がひそんでいなかったとはいえない。

彼女のこのような拒否的態度にもかかわらず，ゲーテは同じ年の4月14日に彼女にあてたあの有名な「あなたは先の世には僕の姉か，または僕の妻だったのだ」という韻文の手紙を書いているし，同様のことを彼はウィーラントにも書き送っている。さすがに作法や道徳の観念のつよい夫人も，ゲーテのこのような親愛の情を一概に拒否することはできなかった。彼女は5月10日にチンマーマンにあてて次のように書いている。「ゲーテとは至極円満に行っています。あの方は，あんなに興奮して飛びだしていってから，1週間後にはあふれるばかりの情愛をたたえて訪ねてこられました。」そしてこれまで宮廷の風習として，手紙その他をフランス語で書いていた彼女は，「愛するゲーテのおかげでドイツ語で物を書くようになりました。」そしてゲーテの豊かな才能とその感化力を認めざるを得なくなった夫人は，「今度あの方を私の聖者と呼ぶことにいたします。」と書いたが，しかしこの最後の言葉は，はなはだゲーテの気に入らぬ言い草であった。それで彼は彼女にこう書き送っている。「あなたが僕を聖者にしてしまおうとなさることは，もっともなことです。それはすなわち僕をあなたの心から遠ざけることを意味するのですから。……よろしい，お会いするのをやめましょう。」

このように燃えさかる詩人の情熱は，シュタイン夫人にとってしばしば恐ろしいものであった。冷静な彼女も，「先の世では僕の妻であった」と言いきられては，彼女の胸を揺りうごかすものが感じられた。それになお絶えず彼女を不安ならしめたのは，うる

さい世間の眼であった。世間の取り沙汰であった。それで上記の手紙をもらった翌日，シュタイン夫人が，当分のあいだ会わずにいたい，と言い送ったとき，彼は書いた。「奥さん，きのうは自分の誓いを守ることがとても辛かったのです。今日もあなたのご要求に従うことは辛いだろうと思います。けれどもあなたに対する僕の愛は，どうせ諦忍の連続なのですから，それで我慢することにしましょう。」次いで5月にもまた，夫人は世間のうわさがうるさいために，彼の訪問を間遠にするよう注意せねばならなかった。およそ，このようなことのあるたびに，ゲーテは世間とか，うわさとかいうものに対して腹をたて，「僕は妹に対してのほかは，いかなる婦人に対しても持ったことのないほど至純，至美，至誠な関係であるのに，それすら邪魔を入れられるとは！」と憤慨しながらも，結局彼女のいうとおりにせざるを得なかった。

シュタイン夫人は理性的性格であるうえに，恋愛の理想的形態は友情であるという，禁欲的な観念をすら抱いている人であったため，ゲーテはひどく苦しみながらもその沸騰する情熱をつねに抑制され，無軌道になろうとする彼は正常な軌道にひきもどされた。彼の官能的な愛欲は昇華されて，諦念と節度と秩序と調和とが次第に彼の心のなかに根をおろしていった。シュタイン夫人はゲーテにとっての形成の原理としてはたらいたのである。彼女が宮廷に仕える年長の人妻であるという予件が，他の恋人のもたなかったような影響をゲーテのうえに及ぼしたのである。

夫人は，殊にはじめのうちは，ゲーテを理想化し，この天才詩人についての観念を愛する傾きがあった。しかるに現実の詩人はあまりにあからまさまで，あまりに単刀直入で，あまりに肌ざわりがあらく，彼女の手に負えぬ感じがしたらしい。ゲーテ自身もアイゼナハの旅先からこんな手紙を出している。「愛する人よ，あなたの僕に対する愛は，僕の不在の時に増してくるように思います。なぜならば，僕がいないと，僕についての観念（イデー）をも愛することがおできになるからです。ところが僕がいるときには，僕についての観念がしばしば僕のばかげた，気ちがいめいた行為で乱されてしまうのです。さようなら。」（1777年9月6日）。ゲーテについても，また道徳についても，ある固定観念を固執しようとするシュタイン夫人と，血肉をそなえた実在の人間や不断に生きてはたらく現実を愛するゲーテとは，一種の対照をなすものであり，この対照はシラーとのあいだにも多少見出されるものであるが，この対照的関係が，むしろゲーテを形成するのに必要なものであったと思われる。

しかしながら，シュタイン夫人といえども木石ではありえなかった。二人の交友の第

五年目には，彼女の方でも異性としての愛情を表示する折々があったのである。長いあいだの詩人の誠実な奉仕は報いられる時がきたのである。それは騎士的ミンネに対して授けられた寵遇(グンスト)であった。その喜びを彼はかつて植えた菩提樹にむかって，「シュタイン夫人に」という詩の文句で語っている。先に夫人から禁じられた du という呼称もついに許された。詩人の書簡集を見ると，1781年の春からの手紙は，この呼称にかわっている。「僕は長いあいだ du と呼ぶことができなかったように，今度はもはやあなたを Sie と呼ぶことはできません」(1781. 3.12)。

このころの二人の交情がどの程度のものであったかは，確証がない以上，永遠の秘密である。けれども夫人はその後も——ゲーテがイタリア旅行から帰り，造花屋の娘クリスティアーネと関係ができるまで——彼にとって自己形成の規矩たることを失わなかったことは事実である。もちろんワイマルの宮廷における環境も詩人に対し形成作用を及ぼしたであろう。また彼の自然研究は，彼をして自然を支配する法則を，偉大なる秩序と調和を，会得せしめたであろう。さらにまたスピノーザの影響も見のがすことができない。けれどもこれらの経験も，決してシュタイン夫人をはなれてなされたものではなかった。なぜならばゲーテは，イタリアへ旅立つまでの10年間，自分の全存在をあげて彼女に傾倒し，いかなる研究でも仕事でも彼女と共に，もしくは彼女と相談しながらなされないものはなかったからである。名作「イフィゲーニエ」(Iphigenie auf Tauris) や「タッソー」(Torquato Tasso) のなかには彼女の面影が理想化して描かれ，「兄妹」(Die Geschwister) も二人の関係のヴァリエーションである。この時期におけるその他の詩も彼女に示され，彼女の批判を経たものである。それにスピノーザの「エティカ」の研究も共同でなされ，ビュッフォン伯の「博物誌」をも共に読み，植物，地質，骨格の研究も，政治，軍事，土木，鉱山の事業も何ひとつ彼女に打ち明け，彼女を相談相手としてなされなかったものはない。

シュタイン夫人がこれほどゲーテの心を支配しえたということは，彼女が総じて理解に富み，人のこころの機微をよみとりうる性格であったことによるのはもちろんであろうが，彼女の出現したその時機がよかったという点も無視することができない。グンドルフ (Friedrich Gundolf) は主著「ゲーテ」のなかでその点を強調して，もし彼女がヴェールターの危機にあらわれても，ゲーテのデーモン（守護神）は他のテューヒェ（運命の女神）を要求したであろうし，またイタリアの旅以後にあらわれても，彼女はゲーテを失望させたか，または彼が夫人の真の性格を見ぬいてその無価値を知ったか，もし

くは彼女の性格が変化したか，いずれあれほど大きな意義をもちえなかったであろう。彼女はちょうどゲーテが必要としたときに，必要なものを提供したのであるという意味のことを述べている。

必要なときに必要なものが提供されるという幸運は，実にゲーテの生涯を通じてあたえられた天の恵みであった。内からの要求と外からの運命とが常に臨機即応の態を示していること，ゲーテのごときは稀に見るところである。シュタイン夫人その人の価値というものは，これを高く評価しても低く見つもっても，大体の程度は知れているのであるが，彼女がゲーテに及ぼした影響ということになれば，それはヘルダーやシラーやスピノーザ以下のものではなかったのである。そしてこの準備があり，この因縁があって初めてゲーテのイタリアの旅は彼の生涯の一大転機をなし，十全な実を結ぶことができたのである。しかもこうした教養体験は，決して彼が意識的に，何らかの意図をもってなされたわけではない。ましてドイツ民族の性格や体験を顧慮したわけではもちろんない。それは全くゲーテという個性の必然的な発展形式にほかならなかった。それなればこそ，彼のこの教養体験は，なおさら民族の体験の象徴としての意味をもつものと思うのである。

1784年に，ゲーテは前に記した13世紀のウォルフラムの叙事詩「パルチファル」(Parzival) から構想をとって「秘密」(Die Geheimnisse) という一大叙事詩をつくろうとしたが，わずか51詩節と，冒頭に添えるべき「献詞」としか書かないでしまった。その「献詞」(Zueignung) はいま彼の詩集の巻頭にのせられているが，これは彼の叙情詩のみならず，全著作の献詞として解することができるものである。この詩のなかでゲーテは，かつて超人気どりで思い上っていた自分の若い日の迷妄を指摘して，世界との調和にはいれ，と命ずる女神のことを記し，これに跪拝して彼女の恵みあふれる「真理の手」から，朝露と陽光とをもって織りなされている「詩の面紗」をうけとることを書いている。この女神は明らかに，彼が尽きせぬ愛慕と感謝とをささげているシャーロッテ・フォン・シュタインを意味しているのである。

(旧稿の抄録ながら西脇博士の御笑覧に供します)